



令和二年如月

城北中だより

城北中学校教育目標

- 思いやりのある生徒
- 真剣に学ぶ生徒
- 健康な生徒

生徒数

1年	173名
2年	155名
3年	176名
特別支援学級	6名
全校生徒数	510名

ことばは、生きている

校長 玉崎 芳行

昨年秋、懐かしい名前の主から、一通の便りが届いた。同窓会の案内であった。新任教員としての初任校で、初めて学級担任を務め、3年間を共に過ごし、初めて送り出した卒業生の代の“同志“であった。彼らは、年齢（よわい）四十一歳となっていた。二つ返事で応えた。『喜んで参加させていただきます。』

令和二年一月四日、その会が開かれた。成人式、卒業式以来の再会もあった。あいさつの時間となった。マイクの前に立った。静かに熱いものがこみ上げてきた。涙を堪えるのに必死だった。

「私は今日、みんなに、ありったけの思いを込めて“ありがとう“を伝えさせて頂きたくてここに来ました。私が今、こうして教育に携わる仕事を続けてこられたのは、間違いなくみんなのおかげなのです。みんなに、教師としての私を育ててもらいました。例えば、今、目の前にいるFさん。みんなが2年生になった4月の終わり頃、新しいクラスで出会ったFさんに、帰りの会後の教室でハッキリとこう言われました。“先生は、今の私たちのことをちゃんと見てくれてない。去年の1年3組を引きずってる。”と。『先生、盛ってる！あたし、そんな風に言ってない！（場内が笑い声に包まれた。）』いやいや、盛ってないよ。あなたのあの一言で、私は教師としての己の未熟さ、至らなさに気付かせてもらえたんです。人と真正面から向き合うということ、人を大切にすることとは… あなたの、あのことばが、それ以来、私の心の支えになりました。他にもね…」

ことばは、生きている。発した人の心の中で、受け取った人の心の中で、どれだけ時間が流れようとも、どれだけ距離が離れていようとも、ことばは、生きている。

さて、あと42日。三年生にとっては、今まで共に過ごしてきた仲間との、残された限りある時間でもある。今、教室には、進路実現に向けた努力と熟慮を重ね、英断と納得をもって進路決定を果たした仲間がいる。その仲間、心からの祝意を伝えよう。たとえ今、自分がこれから臨む試験に立ち向かう、重く苦しい時間の中に居るとしてもだ。そして、先に進路決定を果たしたあなたは、その重く苦しい時間の中で自分自身と闘っている仲間を支えよう。君たちは、四月から、同窓生となるのだ。何年、何十年と時を経ようが、チーム城北の同窓生なのだ。一・二年生も、やがてその時を迎える。

誰かの、心の中で生きることばを、大切にしたい。